

スポーツ参加による社会的包摂に関する研究

—カナダの地域スポーツに着目して—

岡安功*

Macnaughton Julian** 河野慎太郎*** Glover Troy**

抄録

近年わが国では、人口減少や少子高齢社会などが社会問題と広く議論されている。そうした中では、移民もテーマのひとつとして取り上げられている。多文化共生社会を考える時代に入り、どのような多様な人々とのコミュニケーションが求められる。またスポーツの役割や地域スポーツへの参加が社会的包摂や共生社会における役割や可能性を考えることも必要になってきている。

本研究の目的は、外国出身者の地域スポーツへの参加が、社会的包摂や共生社会にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにした。特に本研究は、生涯スポーツの先進国であり多文化社会であるカナダ・ウォータールー地域のランニングサークルに着目し、ソーシャルキャピタルの視点からその現状と課題を明らかにした。

本研究では、半構造化インタビューを通じて質的データをランニングプログラム参加の移民（8名）から収集した。また受け入れ側のボランティアスタッフ（3名）に対しても半構造化インタビューを実施し、現状と課題を把握した。そして本研究では、カナダ・オンタリオ州のウォータールー市とその周辺で活動するランニングサークルに着目した。

結果は、移民ランナーの分析で抽出されたメインカテゴリーは、受容、カナダ、コミュニケーション、信頼、身体活動の5つであった。一方でボランティアに関する分析の結果は、ボランティアスタッフのデータ分析では、受容、カナダ、コミュニケーション、グループ、ランニングの5つのメインカテゴリーであった。両方の結果をまとめると、様々な要素が多文化社会におけるスポーツ活動に存在することが明確になった。そして、移民側の文化などの理解やコミュニケーションだけでなく、それを受け入れる国や国民側の態度や行動という点も重要になってくると考える。

キーワード：スポーツ参加，社会的包摂，地域スポーツ，ソーシャルキャピタル，カナダ

* 広島経済大学 〒731-0192 広島県広島市安佐南区祇園 5-37-1

** ウォータールー大学 〒N2L 3G1 200 University Avenue West Waterloo, Ontario, Canada

*** アルバータ大学 〒T6G 2H9 8840-114 St., Edmonton, Alberta, Canada

A Study of Social Inclusion through the Participation in Sports

—Focused on Community Sports in Canada—

Isao Okayasu *

Julian Macnaughton** Shintaro Kono *** Troy Glover**

Abstract

In recent years, Japanese society is facing some social problems such as a decreasing population and aging society. These situations make immigration one of crucial social issues to address, especially regarding how Japanese society can integrate immigrants to increase its cultural diversity and what roles sport and community sport participation can play in this process of immigrant inclusion.

The purpose of this study was to investigate the meaning and impact of immigrants' participation in sport events in multicultural societies and communities. This study focused on the case of community sport in Waterloo, Canada to understand its current situation and problems related to community sport promotion and social capital.

In this study, the semi-structured interview method was used. Qualitative data were collected from eight immigrant runners as well as three volunteer staffs living in the Waterloo and Kitchener region, in September 2019.

Our thematic analysis of immigrants' runners identified 5 main themes: Acceptance, Canada, Communication, Physical activity, and Trust. On the other hand, five main themes emerged from the volunteer staff data: Acceptance, Communication, Group, Running, and Canada. Overall, it was found that immigrants' running experiences helped them integrate into their host community and society through an increased cultural understanding, enhanced communication with other residents, and learning of the local language. It was also equally important for people of the local community to have a better understanding of and positive attitudes towards immigrants through sporting events.

Key Words : Sport participation, social inclusion, community sport, social capital, Canada

* Hiroshima University of Economics 5-37-1 Gion, Asamimami-ku, Hiroshima, Japan 7310192

** University of Waterloo 200 University Avenue West Waterloo, Ontario, Canada N2L 3G1

*** University of Alberta 8840-114 St., Edmonton, Alberta, Canada T6G 2H9

1. はじめに

地域スポーツは、健康や福祉などに関連して今日の重要なテーマのひとつである。長登・野川 (2014) は、「スポーツを文化として気軽に楽しめるような社会、すなわち誰もが、いつでも、どこでもスポーツに親しむことが出来る社会を実現」することが求められていると報告している。

地域社会においては、社会的ネットワークの構築が必要不可欠である。2000年代より「ソーシャルキャピタル」は、我が国のスポーツ社会科学の分野でも注目され研究されてきた(長積ら, 2009; 稲葉・山口, 2010; Okayasu et al., 2010; 舟木・野川, 2012)。

さらに、日本社会が多様化する中では、社会的包摂としてのスポーツの役割が期待されている。たとえば Harris (1998) は、スポーツや身体活動は、平等な市民社会の形成において大きな役割を担っていると報告している。同様に Allison (1998) や Jarive (2003) も健全な市民社会の実現におけるスポーツ活動の有効性を報告している。つまり、スポーツを共通言語に集い楽しむことは、相互理解に通じ、スポーツによる持続可能な多文化共生社会の創生を示すことができる。近年、わが国でも多文化共生社会を考える時代に入り、どのようなコミュニケーションが求められるのかということを考える必要があると考える。そしてその中でも、スポーツの可能性を検証する事は、重要な政策のひとつでもある。

実際に、日本への2017年の外国からの流入人口数は、OECD (n. d.) の調査によれば世界で4位の約47万人という報告がある。しかしながら、移民に関する定義はいまいちなものである。NHK取材班 (2019) の調査では、この約45万人の中には、「留学」や「技能実習」も含まれており、様々な目的を持ち日本で生活している外国人が存在する。一方で、近年は定住する移民に関して、注目が寄せられている。

当該分野の研究は、かなり以前から進められてきた。北米において Pooley (1981) は、ミルウォーキーにおけるドイツやイタリアなどのヨーロッパ系民族のサッカーチームに関して調査を実施し、部分的にしか社会同化を進んで着ないことを報告した。

また Nogawa (1984) は、日系アメリカ人のエスニックバスケットボールリーグの参加による社会同化の現状を調査し、参加者が非参加者より社会同化している傾向を報告した。そしてスポーツ社会学分野では、近年も様々な視点で研究が進められてきた。

移民など社会が多様化する中では、社会的包摂(ソ

ーシャル・インクルージョン)としてのスポーツの役割が期待されている。たとえば Harris (1998) は、スポーツや身体活動は、平等な市民社会の形成において大きな役割を担っていると報告している。同様に Allison (1998) や Jarive (2003) も健全な市民社会の実現におけるスポーツ活動の有効性を報告している。

我が国においても、当該分野の研究は進められてきた。群馬県の日系ブラジル人を対象に Ito et al. (2011) や 植田・松村 (2013) がある。そして、地域におけるスポーツ・運動プログラムが外国人と地域の連携の可能性が示唆される。

レジャー分野では、移民のスポーツなどレジャー活動研究が、北米を中心に行われてきた。そして、少数派の移民や民族は、人数が増えただけでなく社会の中での重要な役割を担う存在になった (Stodolska, et al. 2014)。Stodolska (2018) は、1986年にアメリカ大統領野外活動諮問委員会でテーマのひとつになり、その後レジャーと人種や民族のテーマは2000年代に入って注目されたと報告している。例えば Shodolska and Alexandris (2004) は、韓国とポーランドから米国に来た移民におけるレクリエーションスポーツの役割に関して検証した。移民の第二世代(子ども)は、レクリエーションスポーツを通じて統合を促進していた。一方で、場合によっては、レクリエーションスポーツへの参加が元の民族に対するアイデンティティの結束につながることを報告した。

また Kloek et al. (2017) は、移民を受け入れる側のオランダ人と移民(中国系、トルコ系)における野外レクリエーションとアイデンティティに着目した。移民は、民族内の状況を考慮した傾向があることが示唆された。

こうして、スポーツ科学やレジャー学分野で移民のスポーツ参加について研究が進められてきた。しかしながら、どのように移民のスポーツ参加を進めることができるのか、またはできないのかを具体的に移民と受け入れる側の両面から明確になっていないと考える。

2. 目的

本研究の目的は、外国出身者の地域スポーツへの参加が、社会的包摂にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにする。特に本研究では、生涯スポーツの先進国であり、多文化国家であるカナダのウォータールー市の地域スポーツに着目し、ソーシャルキャピタルに着目してその現状と課題を明らかにする。そして、今後の地域スポーツ政策への提言を行う。

3. 方法

本研究では、半構造化インタビューを通じて質的データをランニングサークルに参加する移民ランナーから収集した。また受け入れ側のランニングサークルのボランティアスタッフに対しても半構造化インタビューを実施し、現状と課題を把握した。

近年、約 20% が先住民を除く非白人 (visible minority) であるカナダ・ウォータールー市は、年々と非白人の割合が上昇し、約 10 年間の間に 10 ポイント上昇した地域 (Census: Region of Waterloo, 2016) であり本調査のデータ収集に適切な地域と考えた。

本研究における移民は、先行研究の Stodolska and Alexandris (2004) などを参考にして「カナダ以外の国で生まれ、その後自分の意志でカナダに入国した 20 歳以上の男女」と操作的に定義した。

移民ランナーへの主な質問項目は、Graham and Glover (2014) などを参考にして、①ランニングサークルへの参加目的、②ランニングサークルの参加継続要因、③ランニングサークルへの参加でどのようなポジティブ及びネガティブな影響が地域関係に生じたか、④地域発展にとってのランニングサークルの役割をどのように考えるかなど設定した。受け入れ側も、同様の内容と共に受け入れによる社会的包摂の現状と課題を質問として設定した。調査は、約 30 分程度とし、了解を得てすべての参加者の調査は IC レコーダーに録音した。この一連の調査方法に関しては、Rubin and Rubin (2011) や Kono (2015) などの質的研究に関する文献を参考にした。分析作業では、Nvivo (質的研究支援ソフト) を使用した。

調査対象者のリクルーティングは、地域のランニングサークルの練習会等を訪問して主旨を説明した。また、ランニングサークルのメーリングリストへスタッフを通じて投稿してもらい調査への参加者を募った。そして調査に協力する了承が得られたランナーに直接面会してデータ収集を行った。一方で、サークルのボランティアスタッフは、練習会等において調査の主旨を説明して了承が得られたスタッフに調査を実施した。

4. 結果及び考察

本研究は、移民ランナー及び参加するランニングサークルのスタッフへの半構造化インタビューを行った。結果は、移民ランナーが 8 名、スタッフが 3 名からデータを収集した。

4.1. 個人的属性

移民ランナーに関する個人的属性では、男性が 3 名、女性が 5 名であった。平均年齢は、41.6 歳であった。出身国は、オランダやフランスなどヨーロッパ圏から大半であった。カナダの滞在年数に関しては、1 年から 23 年まで様々な状況であった。

次に、ボランティアスタッフの個人的属性である。今回の調査では、3 名から回答を得ることができた。性別は、女性が 2 名、男性が 1 名であった。平均年齢は、47.7 歳であった。職業形態は、2 名がフルタイムで仕事を行い、1 名は無職であった。なお 3 名のうち 2 名は同一のランニングサークルであった。

4.2. 分析結果

分析の結果、移民ランナーは 5 個のメインカテゴリー、32 個のサブカテゴリーが抽出された、一方でボランティアスタッフは、5 個のメインカテゴリー、11 個のサブカテゴリーが収集された。

4.2.1 移民ランナーの分析結果

分析で抽出されたメインカテゴリーは、受容、カナダ、コミュニケーション、信頼、身体活動の 5 つであった。

受容に関しては、ランナー G が「I think everyone is just accepting of everyone.」と述べ、ランナー A は「This makes you feel welcomed.」と回答し、移民ランナーがランニングサークルやボランティアスタッフ、他のランナーから受け入れられていると感じることの回答があった。

カナダに関しては、言語や文化など様々な側面があった。例えば、ランナー A は「It is a good opportunity to meet people from different backgrounds and learn from each other.」と述べ、ランナー F は「You can get to know more about Canadian culture from them or learn about Canadian habits and all other information on Canada.」と回答した。ランニングサークルへの参加が、カナダについて知ることなどにとって良い機会になっていた。

コミュニケーションに関しては、サークル内での何気ない会話からネットワークづくり・友人関係など幅広い回答があった。たとえば、ランナー E は「When we run with the group, we run together, we talk a lot, and we exchange stories from life, from work, from health, so it is really nice.」と述べ、またランナー F は、「All other participants are like friends.」と回答した。このようにランニングサークル内でのコ

コミュニケーションが、様々な方向に結びついていることが記された。

信頼に関しても、親切さやサポートなど幅広い回答があった。たとえばランナーBは、「I definitely have been the recipient of the kindness of other club members.」と述べ、またランナーDは、「I am comfortable to ask for favors or help.」と回答した。このように、安心を裏付ける様々な要因が移民ランナーの回答にあった。

最後に、身体活動である。ランナーCは「I joined the club to maintain my health level」と述べ、ランナーHは「I joined the running club because I needed to lose my weight.」と回答した。つまり、運動不足の解消などとして、比較的気軽に始めることができるランニングを選んだことになる。

この結果を、図1にまとめた。ランニングサークルにおけるコミュニケーションは、サークル参加者を理解するだけでなく、カナダでの生活をする上での情報収集にもつながっている。また、コミュニケーションから友人関係につながり、さらにパーティーやマラソン大会遠征などの交流につながることもあった。その他にランニングサークルへの参加は、他のスポーツより気軽に参加することができ、また心身の健康にとって良いという考え方もあった。集団スポーツは、ルールの理や語学力が最初から求められるかもしれないが、ランニングはそうした点を心配する必要もなく気軽に個人で参加できる活動である。

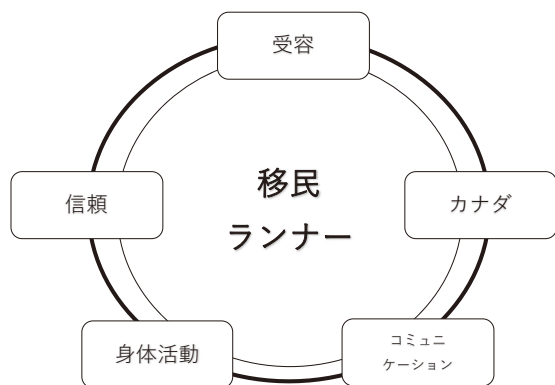


図1. 移民ランナーのメインカテゴリー

4.2.2. ボランティアスタッフの分析結果

分析で抽出されたメインカテゴリーは、受容、カナダ、コミュニケーション、グループ、ランニングの5個であった。

受容については、受け入れる姿勢を表す回答があった。たとえば、ボランティアスタッフCは「We are completely inclusive.」と述べ、ボランティアスタッ

フAは「They are welcomed as much as anybody else.」と回答した。つまり、ランニングサークル全体に新規参加者を受容する土壌があり、それは移民であるかどうかは関係ないということがある。

コミュニケーションについては、話をするのがすべてのはじまりであると考えられる。たとえばボランティアスタッフAは「I talk to them and learn about their culture and ask questions.」と述べ、ボランティアスタッフC「They integrated the same as anyone else.」と回答した。コミュニケーションをとることが、相互理解につながるということです。

グループについては、上記のコミュニケーションを発端に次の段階である仲間を形成している。たとえばボランティアスタッフCは「They have the exact same opportunities that everyone else in the group does.」と述べ、ボランティアスタッフBは「We have a few people that come out to watch our baseball games and to cheer them on.」と回答した。ランニングサークルへの参加が、別の交流機会にもつながっていることも回答では示された。

ランニングについては、気軽に誰もが楽しめるスポーツ活動である。たとえばボランティアスタッフAは「I think they just wear running shoes and just grab any old clothes and they are good.」と述べ、ボランティアスタッフBは「You do not have to pay fees or anything like that.」と報告した。ランニングだけでなく、ランニングサークルの気軽さも言及されていた。

最後にカナダについては、言語や文化、さらには気候についても言及されていた。たとえば、ボランティアスタッフBは「I can see at times are the cultural or the language barriers.」と述べ、ボランティアスタッフCは「Where maybe they are worrying about how they are seen or dressed.」と回答した。

ボランティアスタッフのインタビュー調査の結果は、図2にまとめた。ボランティアスタッフ側の受容だけでなく、積極的にコミュニケーションを取り、カナダやウォータールー地域での生活を考えている。特に、言葉の壁をどのように克服するかであると述べていた。また、カナダの気候の理解も生活を送る上で学ばなければいけないと述べていた。そしてランニングを通じて、少しずつ移民ランナーとの相互理解を進めようとしていることが明らかになった。

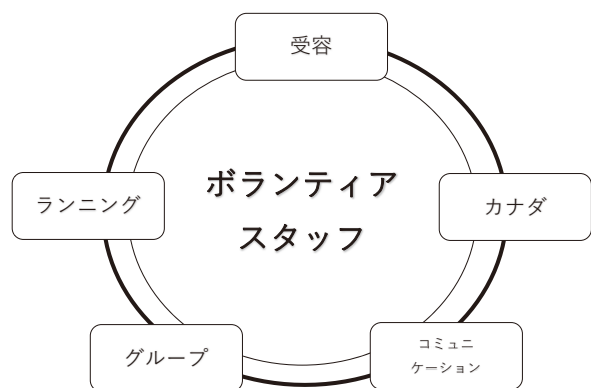


図2. ボランティアスタッフのメインカテゴリー

4.2.3. 両者の融合

上記の通り、移民ランナーとボランティアスタッフへのインタビュー調査の結果をまとめた。これらの結果をまとめ、Graham and Glover (2014)を参考にしての図3にまとめた。ランニングサークルは、ひとつのコミュニティとしてとらえることができる。ランニングサークルの中では、参加する移民ランナーやサークルの参加者間、そしてボランティアスタッフとの接点ができ交流が進むと考える。その中では、コミュニケーションから相互理解や仲間づくりに進んでいくことがある。もちろん、文化的な違いやカナダにおける言語（この場合は英語）の習得などの障壁はある。しかし、双方がその状況を理解していることが重要であり、それを踏まえた交流へと進むことも明らかになった。ランニングという視点では、移民ランナーは運動不足の改善や体重減少を考えて参加することであった。これは、ボランティアスタッフ側も理解しており、双方がランニングの気軽なスポーツとしてとらえていると考える。

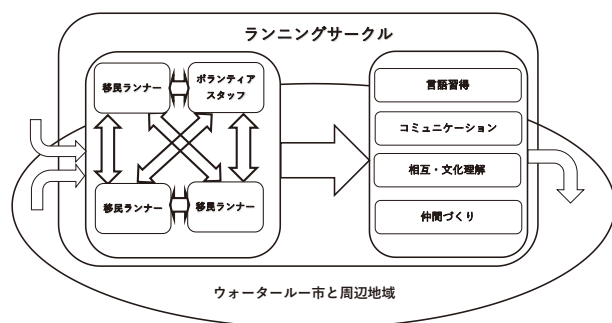


図3. 結果の概要

5. まとめ

本研究は、外国出身者の地域スポーツへの参加が、社会的包摂にどのような影響を及ぼしているのかを明

らかにするものであった。特に本研究では、生涯スポーツの先進国であり、多文化社会であるカナダのウォータールー市のランニングサークルについてソーシャルキャピタルに着目してその現状と課題を明らかにした。

結果は、移民ランナー8名とボランティアスタッフ3名からのインタビュー調査の結果、様々な要素が多文化社会におけるスポーツ活動に存在することが明確になった。それぞれの結果は、5つずつのメインカテゴリーにまとめることができた。

スポーツの根底には、遊びや楽しさがあるが、その部分は本研究の結果からも明らかになった。そしてこの結果は、カナダで移民の高校生を対象にした研究結果と類似するものであった (Doherty & Taylor, 2007) 遠藤 (2019) が指摘するように、移民政策は「受け入れる側」である国民の心理や態度によっても左右されることがある。そして、国民が新しい隣人や環境をどう受け止め、反応するかなどと述べている。これは、本研究の結果からも同様のことが言える。移民ランナーのボランティアスタッフとのコミュニケーションやランニングを通じた仲間づくりは、受け入れ側の受容があって成り立つものである。

この結果を受けて、わが国における多文化社会におけるスポーツの役割を考えると、上代ら (2016) の研究では、日本でのイスラム系在留資格者への調査結果からまだ十分にスポーツ活動を通じた異文化交流が進んでいないことが報告された。こうした中では、野川 (2019) が指摘するように、包摂を超えた対等な関係性を示唆することが「共生社会」としている。この視点が、今後の我が国の移民のスポーツ参加にも必要になってくると考える。そして、それは前述した通り、移民側の文化などの理解やコミュニケーションだけでなく、それを受け入れる国や国民側の態度や行動という点も重要になってくると考える。

最後に、本研究には、いくつかの研究限界があると思う。まず、本研究のサンプル数が少ない点である。結果の一般化に関しては、さらに調査を進めることなどが必要である。また質的研究だけでなく、量的研究を用いて移民ランナーとボランティアスタッフの双方の考えを検証することが必要である。さらに、本研究はランニングサークルに限定したが、今後は他のスポーツや文化活動における状況も調査することが必要である。そして、今後の多文化社会においてスポーツの担うこと事のできる役割をさらに考察することが今後は求められる。

【参考文献】

- Allison, L. (1998) Sport and civil society. *Political studies*, XLVI, 709-726.
- Doherty, A., & Taylor, T. (2007) Sport and physical recreation in the settlement of immigrant youth. *Leisure/Loisir*, 31(1) : 27-55.
- 遠藤十亜希 (2019) 多文化共生主義の憂鬱：多文化共生社会への道を歩み始めた日本に望まれること。
<https://forbesjapan.com/articles/detail/27575>
- 舟木泰世・野川春夫 (2012) 総合型地域スポーツクラブにおけるソーシャルキャピタルの培養：東京都のクラブ創設・育成事業に着目して。日本体育学会予稿集, 63 : 97.
- ゴードン, M. M. : 倉田和四生・山本剛郎訳 (2000) アメリカンライフにおける同化理論の諸相：人種・宗教および出身国の割合。晃洋書房：東京。
- Graham, T.M. & Glover, T.D. (2014) On the fence: dog parks in the (un)leashing of community and social capital. *Leisure sciences*, 36: 217-234.
- Harris, J. (1998) civil society, physical activity, and the involvement of sport sociologists in the preparation of physical activity professionals. *Sociology of Sport Journal*, 15(2) : 138-153.
- 稲葉慎太郎・山口泰雄 (2017) 総合型地域スポーツクラブを対象としたソーシャル・キャピタル論の文献的検討。神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 10(2) : 151-164.
- Ito, E., Nogawa, H., Kitamura, K., and Waker, G.J. (2011) The role of leisure in the assimilation of Brazilian immigrants into Japanese society: aculturation and structural assimilation through Judo participation. 9 : 8-14.
- Jarvie, G. (2003) Communitarian, sport and social capital. *International Review for the Sociology of sport*, 38(2) : 139-153.
- 上代圭子・野川春夫・工藤康宏・秋吉涼子 (2016) イスラム系在日外国人のスポーツ・ライフの調査研究。—イスラム系在留資格者に対するスポーツ政策の基礎情報の収集—。2016年度 笹川スポーツ研究助成報告書, 67-75.
- Kloek, M.E., Buijs, A.E., Boersema, J.J. & Schouten, M.G.C. (2017) Beyond ethnic stereotypes—identities and outdoor recreation among immigrants and nonimmigrants in the Netherlands. *Leisure sciences*, 39(1) : 59-78.
- Kono, S. (2015) Meanings of Leisure in Coping and Adjustment after Hurricane Katrina among Japanese and Japanese American Survivors in New Orleans, *Journal of leisure research*, 47(2) : 220-242.
- 長積仁・榎本悟・曾根幹子 (2009) 行為者間の信頼に基づく地域スポーツ振興事業の組織化と創発：ソーシャル・キャピタルの機能と生成に着目して。体育・スポーツ経営学研究, 23 : 11-31.
- Nogawa, H. (1984) A study of a Japanese-American basketball league and the assimilation of its members into the mainstream of United States society. Doctoral dissertation, Oregon state university.
- 野川春夫 (2019) 総合型クラブが目指す地域スポーツと異文化共生社会の挑戦。みんなのスポーツ, 459, 12-14.
- NHK取材班 (2019) データでよみとく外国人“依存”ニッポン。光文社新書。
- OECD(n. d.) Number of immigrants
<https://www1.compareyourcountry.org/migration>
- 岡崎広樹 (2019) 共存から共生へ、試行錯誤の日々 外国人集住地域「芝園団地」発。Journalism, 348, 12-19.
- Pooley, J. C. (1981) Ethnic soccer clubs in Milwaukee: a study in assimilation. Joy, J.W., Kenyon, G.S. & McPherson, B.D. (eds) Sport, culture and society: a reader on the sociology of sport. Second and revised edition. Lea & Febiger: PA. : 168-178.
- Rubin H.J., & Rubin, I.S. (2011) Qualitative interviewing: the art of hearing data third edition. Thousand Oaks, California: SAGE publishing.
- Stodolska, M., & Alexandris, K. (2004) The role of recreational sport in the adaptation of first generation immigrants in the United States. *Journal of leisure research*, 36(3) : 379-413.
- Stodolska, M., Shinew, K.J., Floyd, M.F., & Walker, G.J. (2014) Race, Ethnicity, and Leisure. Champaign, IL: Human Kinetics.
- The president's commission on American Outdoor (1986) A literature Review. U.S. government printing office.
- 植田俊・松村和則 (2013) セーフティネット化する移民のスポーツ空間：群馬県大泉町のブラジル・フットサル・センター (BFC) の事例。体育学研究, 58 : 445-461.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。